

『文部時報』一九五八年二月（文部省調査局編／帝国地方行政学会）

調査結果から見た社会科の学力

矢口 新

一 小学校

小学校では問題を十五出した。この十五で小学校の学力はどうだなどということは、実はいえない。それこそ、よしのずいから天井のぞくことになってしまう。これは何も小学校ばかりでなく、中学校、高等学校の場合も同様である。この点がかく一般に忘れられがちである。だからこれから問題にするのもあくまで学力調査として出された問題に関するかぎりであって、あまり社会科の学力とどのように考えないでいただきたい。

もう一つ最初におことわりしておきたいことは学力調査の結果が常に、数的な表現にばかりとらわれて見られていて、結局できたとかできなかったとかいうことだけしか問題にならない。そしてそこへ前に述べた社会科全体の学力調査だという誤解が結びつく、「社会科ができないとか」「社会科ができる」とかというような結論になったりして、あわてたり、

喜んだりしている。

そういうことは、学力調査のねらいではない。いな、そういうように考えるのはまちがっているのだということをもよく

考えてもらいたいと思う。その点はこれから調査結果の解釈をしてゆく過程において明らかにしてゆくつもりである。

さて小学校の問題は十五であるが、この中には、地理に関する問題がかなり多く出ている。それから検討をはじめてみよう。第一番の問題に、地図を見て、方角をよみとる問題が出てくる。地図といっても簡単な地図であるが、そこに学校やお寺やお宮、郵便局の符号が書いてある。それを見て、郵便局はお寺のどちらの方角にあるということ判断する問題である。この問題ができるためには、地図に使う符号がわからなくてはならぬ。符号といってもきわめてわかりやすいものである。それからもう一つは方角である。一番の問題はこういう問題五つからできているが、五つの中四つは五〇%以上で中には六〇%以上のできを示しているものもある。四五%の正答率であったのは、鉄道は北西から南東へ走っているというのである。鉄道の符

号がわからないはずはないと思われるので、道がどちらの方向からどちらへ走っているという言い方に迷ったのではないかと思われる。この問題は、地図の符号といってもお寺とお宮とかいった程度であるし、それと方向の組み合わせだから、本当はもう少しできてよいと思つたが案外できていない。おそらく日ごろから地図にぶつかって、こういうことよみ方をしていないことが少ないのではないか。成績は悪くないが何か自信がないといった感想をもたせる解答ぶりである。

川の名とか、平野の名とかを地図上に位置づける問題は、前の問題よりもつとできがよ、平均が六〇%弱である。これは前の問題よりも少しクイズ的である。でも地図上にそれを見つけさせる問題であるから、単なるクイズではない。こういう川とか平野とか海峽とかの名まえに目をつけて地図を読むということは、もう堂に入っているといつてよい。できの悪いのは有明海と吉野川であつて四〇%内外である。琵琶湖などというのは七四%になつている。有明海というとおとなでも知らない人がいる。これで見ると、小学校六年生ぐらいになると非常に一般的な地名はだいたいわかつていっているという気がする。筆者も有明海については、小・中学校のころおぼえたという記憶がない。昔の高等学校で不

知火と関係させて記憶に残った。また最近
は干拓と関係させて知っている。こう考える
と、子どもの常識はかなりできてきているとい
う気がするのは、筆者に常識がないからか。

地図上の鉄道に名まえをつけるという問題
は東海道線が六〇%、東北本線が五四%、鹿児
島本線が四八%、山陽本線が三九%となってい
る。案外知らないという気がするが筆者自身も
そういうことをはつきり知ったのは旅行する
ようになってからだと思うとあまり要求もで
きない。そんなに年中地図を見ているわけな
し、その必要もあまりないのだから小学校ぐら
いではまあまあ力だということであろう。
地図を使う回数が今後多くなれば、しだいにそ
ういう記憶も沈んでいくであろう。

地図上の工業地帯に名をつけるのは鉄道
よりよくできている。北九州工業地帯などと
いうのは、名まえがわかりやすいこともあつ
て、八三%が正答している。次にその工業地
帯のおおよその特徴が出ていて、これはどの
工業地帯かという、半ばクイズ式のものであ
るが、これも案外にできがよく、平均が五
四%をこえている。たとえば、「炭田が近く
にあり、大きな製鉄所などがあつて、金属工
業が特にさかんな工業地帯」というような特
徴のあらわし方であるが、おとなでもいきな
りこう問われたらなかなか答えられないか

もしれない。今時のこの年令の子どもは、こ
ういうことをふだんからよく問題にしてい
るのである。どこの工業地帯かどうか
こうだとかといった思考を年中社会科など
でやっているであろう。むしろおとなにな
ると、忘れる一方で、その意味では、子ども
のほうがこういう学力が高いといえよう。

次に少し高度な問題で、農業地帯の特色が
述べてあつて、これはどこかと判別するのは、
やはり五〇%以下である。たとえば「畑をで
きるだけうまく利用して、それぞれの季節に
もうけの多い野菜を何回も作っている」、こ
れは大都市に近い農村というのと結びつく
のであるが、三六%のできである。専門家は
近郊農村の野菜地帯という言い方をすると
ころだがこういうことに対する関心を今の
一般のおとなは持っていない。その意味では
子どもの力はたいしたものといえよう。

歴史的な問題で、基礎的な概念、たとえば
城下町、貝塚、関所はどういう所かを知って
いるかどうかを見る問題は七〇%以上八〇%
のものもある。常識はできているのである。
本陣というのが一つだけ四二%だったが、こ
れはおとなでもあやしい。またごく一般的な
でき事、たとえばはじめて鉄道が敷かれたと
か、東海道五十三次の宿場ができたとかいっ
たことについて時代はいつごろかというこ

とを現代なのか、武家時代か、そのもう一つ
前なのかという程度で聞いてみるとだいた
いわかつている。(五七%)しかし問い方を
かえて五つぐらいの事件をならべ順序をつ
けさせると正答が落ちる。はつきり歴史の全
体的概観ができていないということである
う。つまり問われたことは常識的で簡単なこ
となのだが、全体の中に位置づけなくてはで
きないからである。歴史についてそういう力
ができれば、これはたいしたものである。

明治以後の工業の発達に条件となったこと
は、何かということも多く事実の中からさが
すという問題は、六五%以上で、なかなかよい。
こういう力がのびているのはたのしい。

力が足りないと思われるのは、表やグラフを
よんで解釈することである。平均三七%。じつ
くり資料を見て分析するという、いわば科学的
思考がなされていない。こういうことをめんど
うがり、結論だけをほしがるのは、日本の先生
の性質でもある。もちろん日本人全体がそうで
ある。子どももそれを受けている。そういう力
をつけるのは、これからであろう。

経済的な問題で、供給が多くなれば物価が
下がるという程度のごく通俗的な常識的思
考は八五%ぐらいまで答えている。これはし
かし工芸品のようなものは大量生産できな
いから価格が高いというような思考までは

のびていない。こういう問題になると五五％と下がる。微妙なところである。これは具体的な事実について考えることが行われればだんだんのびるであろう。

その他の非常に一般的な社会的常識、税金をおさめるのは税務署だといったことは七五％以上がわかっている。もっとも赤ん坊の出生届はどこへするなどといったことは、ちよつと子どもに意外なかもしれない。五〇％に下がっている。また農協は何をするかという問題、これは都会ではおとなが案外に知らないが、子どもはその仕事の少なくとも一つぐらいは半数以上が知っている。これも広く社会を考える習慣が子どもについたということ、こういうことを積み重ねてゆけば、子どもの社会を考える力ははずんずん上がってゆくのでないか。

二 中学校

地図の符号がよめるかという問題は中学校にもある。水田、広葉樹林といった程度の符号、地形の傾斜が見られるかといった問題であるが、だいたい七〇％以上と見てよい。ぶどう畑、というちよつとこまかい問題が多少わかった。また谷合の道か尾根の道かを判別するのがわかった。といつても五〇％内外である。

同じく地図が関係している問題で、たとえば、地図上に、りんごの産地がドット式にかいてある。その他、米とか、みかんとかそれぞれ別々の地図に出してある。どの地図がりんごの産地を表わした地図で、どの地図がみかんの産地を表わしたものを判別する問題である。これは、つまり青森のりんごで、静岡のみかんというように知っていればできる問題だが、さすがにできていない。りんごなどは九〇％である。まゆがちよつと低くて五〇％。まあこの程度の常識はできているということであろう。

もう一つ世界地図の上に地名をつけるのと、その地域の特色を指示するのが一つになっている問題がある。たとえば、スイス、ウラル山地、ボンベール付近とかいった地名である。これは五大湖付近というのが六五％でいちばんできがよく、ボンベール付近というのが四一％でいちばん低い。地域の特色をあてるのはややクイズ式だが、ランカシャーとヨークシャーについて、「山脈の東側では毛織物工業が、西側では綿織物工業が盛んであるだけ」でなく、石炭、鉄鉱石などの資源を利用して造船、機械などの重工業が発達している」というのはわからなかったとみえて、できたのが二八・四％になっている。ウラル山地の説明も正しくウラルと指摘できたのは、二

六％である。こういう問題が全然前提なしで出されたら、専門家でもめんくらうけれども五つの地方のどれかだとわかっている、よみくらべて、これは五大湖付近のことをいっているらしいとか、これは山国とあるからスイスだろうとか判別するのである。だから重大な特色を知っていると判別できるのが普通である。筆者も中学校時代におぼえがあるがこういう特色をことばでおぼえようとして教科書を暗記したが、本当はよくわからなかった。視覚教材などで具体的に、また総合的につかむと頭にはいる。外国のことではあり、しかも抽象的なことばで学習したものだからそういった知識が身につけていないのもあたりまえであろう。筆者もヨークシャーとかランカシャーが身についたのは、大学へはいつて産業革命史に興味をもったころであったことを考えると、この程度もまあまあという気がする。

歴史的な知識を調査した問題で、歴史的事実、事件の時代区分をきいた問題がある。銅鐸、鎖国、大化の改新といったことが、原始時代か古代か、前期封建時代かと聞くのである。平均五五％でまあまあというところである。株仲間、座の発達、御成敗式目などというやや特殊なのは悪く、八幡製鉄所などというのは八〇％にも達している。二年生で通史

をひとり学習した程度としては、忘れてい
るほうが本当のような気がする。多くの大人
はこれよりはるかに低いことうけあいである。

同じような問題で、時代の区分でなく、そ
のこと自体の意味を聞く問題は前のよりも
う少しできがわるい。たとえば地租改正、新
田開発ということの意味を聞くといった問
題である。地租改正について、「全国の土地
の地価を定め、その百分の三を税として、地
主から現金で納めさせるようにした」とある
のを、地租改正というのと結びつけるわけ
がある。これは五〇%のできであるが、他に類
似のあるわけでないから読めばわかりそう
なものだが、こういうことが、歴史の学習の
中で印象に残っていないのであろう。平板な
学習の結果でないだろうか。班田収授の法が
六〇%、土一揆が七十一%でよくできている。
同じような性質の問題で、西洋の歴史につ
いて出したものは、さすがにできが悪かった。
アメリカ合衆国の独立、モンテスキュー、ル
ソーの啓蒙思想などというのが五〇%以上
でこれはいいが、イギリスの名誉革命など
というのは三〇%程度である。

しかし国会開設ということに関係のある
歴史的事実をあげるといふ問題では、板垣退
助の愛国社などというものは七五%からが
あげている。福沢諭吉の学問のすゝめなども関

係ありとして七〇%近くがあげている。こ
ういう思考力はこのごろの中学生はおとな
りあるかもしれない。

できの悪いのは、グラフ、統計表を見て事
実を判断するという問題で、力の不足をはっ
きり見せている。思考がリアリストイックで
ないこと、また、自ら判断するという態度が
ないことなどが原因であろう。

広い意味の道徳に関する問題で、民主主義の
公式的な態度を聞いた問題は七五%がわかっ
ている。自分と反する意見が多数決できまつた
時の態度を問題にしたのである。つまりこのよ
うな公式についてはまず卒業といつてよい。

三 高等学校

憲法の基本的な規定について文章完成法
で問題を出したが、非常によくできた。だい
たい八〇%であるが、五〇%以下のできだつ
たのは、内閣、国会などの手続に関するよう
なこと、多少縁が遠く感ぜられるものであ
る。「すべて国民は健康で文化的な最低限度
の生活を営む権利を有する」などというのは
九二%の正答で、こういう原則的考え方はも
う高等学生には常識以上にあたりまえの考
え方なのかもしれない。自信を思わせる解
答で、定時制でも八〇%近い。

政治に関する問題で、諸外国の政治上ので

き事、たとえばイギリスの「労働党が、一九
四五年の総選挙に勝って政権を獲得した後、
重要産業の国有化、社会保障制度を推し進め
戦後の復興に努めた」という事実をあげて、
これをイギリスと判別させるのである。この
問には五五%が正答であったが、他は三五%
ぐらいであった。案外視野が狭いという印象
をうけた。新学的常識ママであるのに、入学
試験と関係がないからか。こういうことは日
常心掛けていてわかることであつて、試験勉
強的におぼえることでない。何か余裕のない
という感じをあたえる傾向である。学力に幅
がないともいえようか。同様な方式で各国の
政体についても五つ問題を出したが、日本に
ついてはさすがに八〇%が正答である。アメ
リカ六一%、スイスがわるくて一九%である。
ソ連は五四%。ソ連についての問題は、「権
力集中制をとっている連邦国家で、憲法で認
められた唯一の政党によつて実際の政治が
運営されている」とまことに淡々とした表現
である。関心をもつ必要のある国の政体につ
いて、こういうように考えてみることも必要
であろう。

経済に関する問題は一般にできがわるい。
まず国民所得の数表を出してこれを解釈し
た文章を完成させる問題で、非常に悪かつた
ところは、「上の表に示してある名目国民所

得を物価指数で割って実質国民所得を求め」という所である。(二〇%) 別に掲げてある名目国民所得とか物価指数とかを文の空欄に書き入れてこの文を完成するのであるが、これができないのは、経済的な現象に関して頭の弱さを示している。じっくり、具体的に、しかも理論的に考える力の不足を思わせる。

この点は、農業問題を取り扱った問題で、統計グラフを解釈した文を読んで、どのグラフによって立論したかを判別させた場合も同様であった。グラフを使っていない立論だという判別は七〇%以上もできるが、どれとどれを使ったかを判別することになると、ひどいのは七%である。高校生の頭の非科学性を思わせて情なくなる。科学とは社会に対しても必要であろうに。もっとも、日本の漁業についての簡単な統計表を見て、その表を叙述したといった程度の問題ならできる。七〇%—八〇%にもなっている。これはしかし中学生に課しても同様な程度の答を出すであらうような問題である。つまり統計の解釈力その組合せによる理論的思考力といったものは、いっこのびていないということになりそうである。試験準備的学習に問題のあることを証明するような結果を示している。

経済の問題については、また、別の側面から見てみた。約束手形とか赤字公債政策とか

いった概念とそれに見合う説明を出しておいて、二つを結びつける問題であるが、約束手形が五八%カルテルが四四%のべきを示したほか、公正取引委員会、赤字公債政策、公開市場操作などは二〇%以下である。かなり詳しい説明が書かれてある文であったが、それが読めないのは、現在の新聞常識的経済現象についても、高校生は不感症におちいつているということであろうか。現実的、具体的な社会事象について考える力がないというのは心配なことである。このまま育つて封建時代の愚民とちがわなくなつては大変である。

経済については、歴史的なことを聞いてもまことに弱い。ドッジラインについて、それが経済再建の根本方策としてデフレ政策であったこと、経済自立のための健全財政政策であったことを確認できるかどうかという問題は、一〇%しかできない。戦後の日本の歴史も学習しているが、筋金がいらないのですっかり忘れてるのである。むやみやたらに多くの事実をならべて覚える学習から、もっと構造的な理解をさせる学習に切りかえないと、大事な思考力が消滅するのではないか。同様な形式でワグナー法についての問題は一一%、これは多少専門的であったようである。しかしイギリスの産業革命の結果について四四%、日本の明治以後の貿易の発

展についての問題は三六%で、どうもこの方向の力はどこから見ても弱い。

一般文化史で人物の名まえとその業績とを結びつける問題、更にその人物を年表の空欄に位置づける問題は、概してできがわるい。平均四〇%である。吉野作造と民本主義となえたということが結びついたのは一二%しかない。シーボルトは一九%、外人のほうがよくわかっていて、シェイクスピアは八三%も正答がある。しかしおよそ何世紀の人かということがはっきりしない。歴史の概観ができていないからであろう。さ末な事にとらわれているためかもしれない。歴史の考え方の不足であろう。

労働組合のあり方についての問題は、民主的考え方の具体的なものをきいた問題ともいえるが、平均五三%である。これは自主性の確保についての問題がきわめて悪く、二八%で、他は二つが七五%、あと一問が五〇%であった。この自主性の問題は、組合の規約を作成する場合、使用者に相談してつくってよいかどうかというやや手続的な問題がはいっていて、これを誤ったのであろう。本当はかまわないのだが、なんでも組合だけで考えたのであろう。その辺に形式的民主主義の考え方があるといえ言えそうである。

(国立教育研究所教育内容第二研究室長)